

叡尊教団の河内における展開

— 西大寺直末寺教興寺・寛弘寺と五輪塔 —

松 尾 剛 次

(文化システム専攻思想文化領域担当)

はじめに

本稿の主なねらいは、河内国（現、大阪府）の叡尊教団の展開を考察することにある。叡尊（1201-1290）は奈良西大寺を拠点とし、天皇・将軍から非人と呼ばれた人々までを救済し、当時の宗教面のみならず政治・経済・文化に大きな影響を与えた。全国に西大寺末寺が展開した¹。しかし、15世紀半ば以降、次第に勢力を失っていき、多くの末寺が転宗あるいは廃寺になったために、その展開を跡づけることは困難である。ここでは河内国にしばってその展開を復元してみよう。

河内における叡尊教団の展開に関しては、上田さち子氏²、細川涼一氏³、元興寺文化財研究所⁴、棚橋利光氏⁵、小谷利明氏⁶などの研究がある。こうした研究に導かれながら、河内における律宗の展開を明らかにしたい。

ところで、叡尊教団の展開を考える際に注意すべきことに、彼らの信仰がある。すなわち、叡尊らは釈迦信仰を中核として弥勒信仰・舍利信仰・聖徳太子信仰・行基信仰を有していた⁷。それらは、一見、多元的に見えるが、いずれも釈迦信仰に収斂される。

叡尊は、強烈な釈迦信仰を有し、「釈迦の正法に帰れ」を目標に、種々の活動を行った。戒律復興活動もその一環であったし、生身の釈迦如来像とされる清涼寺式釈迦像を本尊としたのもその一つの表れである。また、無仏世界のこの世において、釈迦に代わって民衆を救う地蔵や文殊への信仰を有していた。釈迦の遺物である舎利の力にすがろうとし、56億7千万年後に仏となってこの世に下生する弥勒による救済を願った。また、日本仏教の教主としての聖徳太子を信仰し、行基の活動に

学ぼうとした。それゆえ、聖徳太子・行基ゆかりの寺院などの復興は叡尊等の目標であった。

こうした点を踏まえて、河内国の叡尊教団の展開を考察する。なお、河内国には、14世紀末において13箇寺の西大寺直末寺が所在したが、その内、五輪塔などが残っている、教興寺と寛弘寺に注目する⁸。

第一章 河内教興寺

第一節 西大寺末寺内における教興寺の位置

大阪府八尾市に所在する獅子吼山教興寺は、真言律宗寺院として現在も西大寺末寺である。それゆえ比較的多くの史料が残っている。教興寺の歴史については『八尾市史』⁹、上田氏¹⁰、細川氏¹¹、元興寺文化財研究所¹²、などの研究がある。それらによって、教興寺の歴史はかなり明らかにされている。それらを踏まえつつ、教興寺の歴史を見直そう。

教興寺は、縁起によれば聖徳太子が物部守屋討伐を祈願して秦河勝に命じて創建した寺という。境内からは、白鳳時代からの古瓦が出土しており、古代から大規模な寺院であったという¹³。注意すべきなのは、教興寺は聖徳太子ゆかりの寺院であった点で、それゆえにこそ叡尊等は復興をめざしたのである。

しかし、鎌倉時代には荒廃していた。そうした教興寺を、叡尊はその弟子如縁房阿一らとともに復興を行った。その際、核になったのは、教興寺にあった創設以来の舎利であった。叡尊の舎利信仰が、その点にも表れている。それ以後、奈良西大寺の末寺として大いに繁栄を遂げた。その復興は文永6（1269）年に開始された。また、暦応2（1339）年8月18日には室町幕府によって利生塔

が設置される^{*14}ほど重要視された寺院であったことなどは大いに注目される。

まず、叡尊教団の寺院としての教興寺に注目する。すなわち、叡尊教団内における位置付けを明らかにしよう。

史料 (1) ^{*15}をみよう。

史料 (1)

河内国

西琳寺 大慈院

丹南

真福寺

東条

寛弘寺 大慈院

六辻

西方寺 東一

教興寺 護国院

泉福寺

東亀井

千光寺 大慈院

八尾木

金剛蓮花寺

金輪

薬林寺

三箇

神弘寺

丹三

広成寺

布忍ヌイシ

宝泉寺

誉田奥院 応永十四年丁亥七月廿日

宝蓮花寺 第二十代長老御代二室

<太字は松尾>

史料 (1) は、明德 2 (1391) 年に書き改められた西大寺末寺帳の「河内国」の部分である。教興寺は、西琳寺について第 2 番目に記載されている点が注目される。

この西大寺末寺帳は、西大寺の直末寺、すなわち、西大寺が長老 (住持) を直接任命する末寺を書き上げたものである^{*16}。それゆえ、教興寺は、いわば西大寺の直轄下の末寺であった。この点は、従来、それほど注目されていないが大いに重要である。

また、末寺帳の記載順は、寺格を表しているので^{*17}、教興寺は河内の西大寺直末寺の中で第 2 番目にランクされていたと考えられる。この点も、教興寺の西大寺末寺内における位置を知るうえで

重要である。

さらに、永享 8 (1436) 年の「坊々寄宿末寺帳」にも、「護国院」分として教興寺は見える^{*18}。この「坊々寄宿末寺帳」は、毎年光明真言会のさいに全国の末寺から西大寺に集ってきた末寺の僧衆が寄宿する坊ごとに、その末寺を書き上げたもので、200 箇寺が書き上げられている^{*19}。光明真言会は叡尊が文永元 (1264) 年 9 月 4 日に西大寺建立の本願称徳女帝の忌日を期して、7 昼夜にわたって亡者の追善、生者の現世利益のために光明真言を読誦する法会であり、諸国の末寺から僧衆が集り、西大寺内に宿泊して法会を勤修する叡尊教団の年中行事の中で最大のものであった^{*20}。

ようするに、教興寺僧は、西大寺光明真言会に際して、西大寺護国院に寄宿したのである。史料 (1) に「護国院」と見えるのは、そのことを表している。



<現在の教興寺>

第二節 教興寺復興と教興寺洪鐘

ところで、教興寺の復興に関連して、上田氏は、教興寺の洪鐘が在地の一結衆によって建造されたことをもって、教興寺は西大寺系律寺の中でももっとも民衆的な寺院とされる^{*21}。この点について再考しつつ、教興寺の復興を見直そう。

現在、高野山に伝わる教興寺の洪鐘には次のような銘文がある。

史料 (2) *22

敬白

河内國高安郡教興寺洪鐘一口

右一結諸衆同心合力且爲佛

法興隆減罪生善且爲法界衆

生平等利益所奉鑄也

弘安三年庚辰正月廿五日

大工沙彌專念

施主

美乃正吉

僧 教善

坂上二子

僧 行念

葛井末正

僧 禪慶

僧 善識

物部末次

坂上守未

坂上影助

菅野友正

坂上助守

沙彌賢佛

山口末吉

物部頼安

坂上影恒

沙彌西念

安部吉弘

坂上助光

坂上助安

僧 良暹

左衛門尉中原清季

僧 念生

大勸進浄縁

修理本願南都西大寺長老叡尊

史料 (2) の銘文からは、叡尊が本願となり、浄縁が大勸進、美乃正吉など 23 人が施主となり、大工専念によって洪鐘の修造がなされたこと、弘安 3 (1280) 年 1 月 25 日付で完成したことなどがわ

かる。

従来、この銘文に書かれた 23 人の一結衆は教興寺近在の民衆と考えられてきた*23。さらに、細川氏は、修造の総責任者といえる大勸進浄縁は、如縁の誤りで、教興寺の長老如縁房阿一のことであろう*24と考えられている。

はたしてそうであろうか。次の史料 (3) をみよう。

史料 (3) *25

弘安三年〈歳次庚辰〉三月十七日未尅、衆僧共参内宮、八人祢宣〈但五祢障不宜依故参、〉正衣冠参会对面、其後参風宮、一祢宣延季於風宮心閑可面談之由申送、仍諸僧大略退出、上人以下同侶四五輩残留〈性鏡恵 澄恵 善海基 蓮基等也、〉于時一祢宣〈束帶〉八称宜〈衣冠〉参会、於鳥居前談話、俄而巫金号侍従又来臨、延季云、此女人者卜筮之上手也、有不審事者、可被尋云々、上人申云、無別子細、但今度為祈異国難并天下泰平仏法繁昌、雖企参宮、真実叶神慮、又成就所願之条、頗以不審云々、于時女人異相屡現、吹呻振袖再三、出清亮之声示云、我是牟山神也、此三箇日間、我君宮中召置、今度法施御随喜之趣、可奉告示之由、蒙詔勅也、法性真如之月、寂光之空朗、無相涅槃之雲、四徳之山静、云济生利物御誓深、故光和跡垂結縁衆、

山口末吉

物部頼安

坂上影恒

沙弥西念

安部吉弘

坂上助光

坂上助安

僧 良暹

左衛門尉中原清季

僧 念生

大勸進浄縁

修理本願南都西大寺長老叡尊

史料(3)は、叡尊が伊勢神宮に奉納した御正体に納入された文書である。それによれば、弘安3(1280)年3月17日に叡尊らが伊勢内宮に参宮した際、叡尊らの参宮が神慮に叶うのか否かを心配した叡尊らに対して、ご神体が現れて叶っていることを伝えたことがわかる。この背景には、伊勢神宮は、僧侶の参宮を忌避する慣行があったからであろう。

ここで注目したいのは、文末に記された山口末吉以下の結縁衆である。おそらく、彼らは御正体の制作費用を出したのであろうが、その結縁衆の全員の名前が弘安3年1月25日付の教興寺の洪鐘の一結衆にも見られる点である。つまり、山口末吉以下の人びとは教興寺の洪鐘のみならず、伊勢神宮の御正体の制作にも協力しているのだ。

とすれば、彼らは、教興寺近在の人びとであったかははっきりしないのである。むしろ、教興寺の近在の在地民衆であったというよりも、叡尊教団の信者で、叡尊の呼びかけに応じて結縁した人々と考えべきであろう。

史料(4)^{*26}

限永代奉沽却 九条東寺前銚子口田事

合五段者〈号弼正寮〉

右、名田者、重代相伝当知行之地也、但弼正寮之本所当壺石捌斗、致其沙汰、於下地者、重代相伝無相違私領也、仍相副次第証文等、限直錢五十貫文、奉沽却五条殿之状如件、

正和二年九月三日

中原清季(花押)

史料(4)は、中原清季が正和2(1313)年9月3日付で私領である京都の九条東寺前銚子口田五段を五条殿に売却したことを表わしている。

ここで注目されるのは、売主の中原清季である。弘安3(1280)年に教興寺洪鐘建造や伊勢神宮御正体の制作に結縁した左衛門尉中原清季と同一人物だとすれば、九条東寺前に私領を有する人物で、「左衛門尉」という官職を有する武士であったのだろう。それゆえ、中原清季は、教興寺近在とい

うよりも、京都の住人であったかもしれない。

以上のように、教興寺洪鐘の修造に参加した人々の内、とくに山口末吉以下の人々は、叡尊の信者であったとはいえるが、教興寺近在の在地民衆とはいえないと考える。

以上のことを考え合わせるならば、教興寺の洪鐘のみならず、伊勢御正体の大勧進をも務めた浄縁を、教興寺長老如縁房阿一と考える必然性はない^{*27}。

そして、浄縁房という名は、叡尊の弟子に2人いる。「大和国人 覚舜 浄縁房」^{*28}、「常陸国人文教 浄縁房」^{*29}である。ここでは、その内の一人であったと考えておく。

第三節 教興寺と垣内墓地

教興寺から南に300メートルほど離れたところに垣内墓地(大阪府八尾市垣内5丁目)があり、そこには塔の総高が2メートルを超える花崗岩製の五輪塔がある^{*30}。それは「行基さん」と呼ばれ、行基墓地と考えられている。この五輪塔については、細川氏の指摘がある。細川氏は、この五輪塔を如縁房阿一の墓ではないかと考えている^{*31}。関連史料がないために、その当否を論じることは困難であるが、後述のごとく、その可能性はあると考える。

本五輪塔は、総高277.3cm、塔高は196.0cm、地輪の高さは53.0cm、地輪の幅は71.5cm、水輪の高さは50.5cm、水輪の幅は68.2cm、火輪の高さは41.5cm、火輪の幅は67.5cm、風輪の高さは19.5cm、風輪の幅は38.7cm、空輪の高さは31.5cm、空輪の幅は37.0cmある^{*32}。

叡尊教団は、鎌倉時代から南北朝期にかけて、塔高2メートルを超える巨大五輪塔を数多く建立していった。その建立の背景には、叡尊らの弥勒信仰があった^{*33}。すなわち、彼らは56億7千万年という途方もない未来に仏となって、この世に下生し、3度説法して衆生を救済する弥勒仏の救済に会いたいという弥勒信仰である。それゆえ、56億7千万年という年月に耐えられるように硬



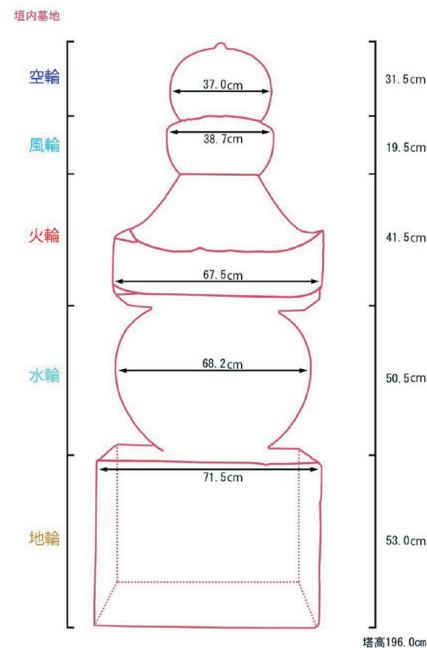
＜垣内墓地五輪塔＞

い石で、巨大な五輪塔を作り、その下に頑丈な金銅製の骨蔵器に入れた火葬骨を納めた。しかも、3度の説法のいずれかに会うべく、忍性の3つの五輪塔のように³⁴、3つの塔に分骨した場合もあった。

ところで、鎌倉期の2メートルを超える五輪塔は70例ほどあるが、そのうち、60例ほどを写真にとって線画処理して比較すると、52基は水輪の形に注目すると、82頁の図の3つのパターンに区分でき、いずれも、叡尊教団関係の石工が建立したと考えられる³⁵。

3系統というのは、西大寺奥院叡尊五輪塔系と木津惣墓系、京都蓮台寺系である。本五輪塔は、そのうち、蓮台寺系であり、教興寺関係の五輪塔であることが、それから考えられる。

ところで、本五輪塔には銘文がないため、誰の墓塔であるかはっきりしない。ただ、叡尊教団の五輪塔で無銘のものは、僧侶の墓塔と考えられている。しかも、塔高196cmという巨大さを考慮すると、教興寺の実質的な開山であった阿一房如縁の墓塔である可能性はある。



第二章 河内寛弘寺

第一節 西大寺直末寺としての寛弘寺

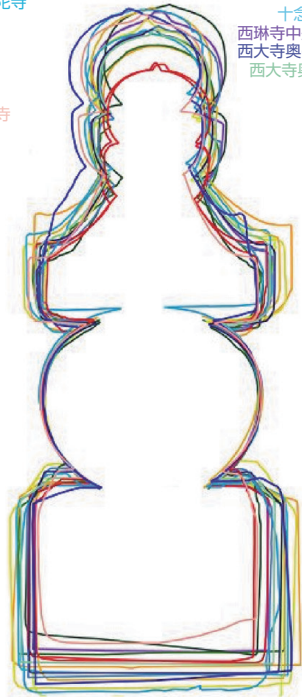
大阪府南河内郡河南町に所在する河内寛弘寺は、現在廃寺であり、文献史料も少なくほとんど知られていない。しかし、中世においては、後村上天皇の宿所となるような、規模の大きな寺院であったと考えられ、優れた研究の蓄積がある。

中世律寺寛弘寺に関し先鞭を付けたのは、細川氏³⁶であった。その後、1980年代以来の寛弘寺地域の発掘調査を踏まえた小林義孝³⁷、西山昌孝³⁸らの優れた研究がなされ、中世寛弘寺の全体像が明らかとなっている。とくに、両氏の研究は寛弘寺とその石造物に関する到達点と評価できる。

本稿は、そうした研究を踏まえつつも、律宗寺院としての寛弘寺についてより明らかにしたい。前章で触れた西大寺末寺帳の「河内国」の部分＜史料(1)＞には、寛弘寺はその5番目に記載されている。それゆえ、寛弘寺は、教興寺と同様に、西大寺直轄下の末寺であった。

また、先述したように末寺帳の記載順は、寺格を表している³⁹ので、河内の西大寺直末寺の中で

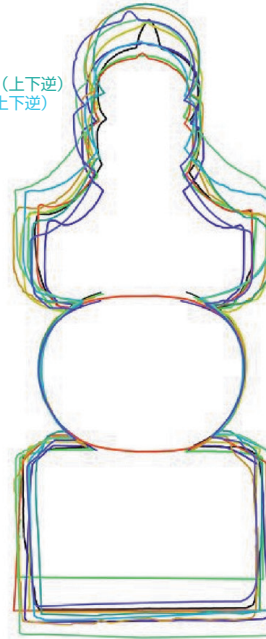
叡尊五輪塔
伊賀阿弥陀寺
戒泉寺
光明坊
石塔院
定証
当麻寺
伊賀仏勝寺



叡尊系五輪塔

伊賀大龍寺
伊賀正福寺大
十念寺 (上下逆)
西琳寺中央惣持五輪塔
西大寺奥の院伝信空塔
西大寺奥の院第2塔
光明寺跡

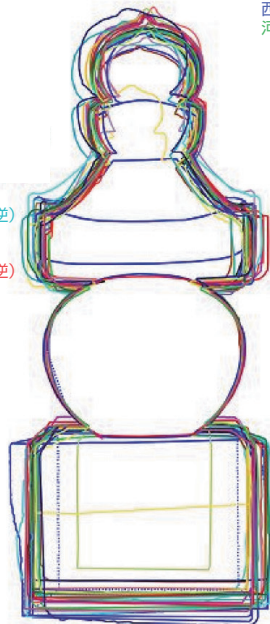
木津惣墓
東山太子堂 (上下逆)
西国寺
極楽寺
伊勢弘正寺
船橋西福寺
千葉大日寺 (上下逆)
浄光寺右 (上下逆)
浄光寺左
丈六寺



木津惣墓系五輪塔

蓮台寺
安楽寿院
八幡大乗院
泉橋寺
石手寺
寛庵寺右
寛庵寺左
乗禅寺
今治馬場
今治坪之内
京都岩船寺
伊賀無量寿福寺
伊賀蓮勝寺墓地
伊賀蓮福寺 (上下逆)
伊賀西光寺
室生寺
奈良蓮台寺 (上下逆)
光岩院
不退寺
額安寺
円成寺
垣内墓地
身方塚
東阪墓地

東小共同墓地
西小共同墓地左側
西小共同墓地右側
河内寛弘寺墓地



蓮台寺系五輪塔

第5番目にランクされていたと考えられる。この点は、寛弘寺の西大寺末寺内における位置を知るうえで重要である。

さらに、永享8(1436)年の「坊々寄宿末寺帳」にも、「大慈院」分として寛弘寺は見える^{*40}。すな

わち、寛弘寺僧は、西大寺光明真言会に際して、西大寺大慈院に寄宿したのである。先述の史料(1)に「大慈院」と見えるのは、そのことを表している。

また、「坊々寄宿末寺帳」に見えることから、永

享8(1436)年においても西大寺末寺であったこともわかる。

ところで、小林氏が指摘されている^{*41}ように、寛弘寺は、「西大寺光明真言過去帳」^{*42}にも記事がある。「西大寺光明真言過去帳」というのは、西大寺関係者の物故者名簿である。

その「西大寺光明真言過去帳」には、宝徳2(1450)年に死去した西大寺寺第27代長老沙門良誓と長禄1(1457)年に死去した西大寺寺第廿八代長老沙門元澄との間に「識運房 寛弘寺」が見える。すなわち、寛弘寺僧の識運房は、1450年から1457年の間に死去したのであろう。

また、長禄1(1457)年に死去した西大寺第28代長老沙門元澄と文明3(1471)年12月12日死去した西大寺寺第29代長老沙門高筭の間にも「浄識房 寛弘寺」と見える。浄識房は、1457年から1471年の間に死去したのであろう。

文明3(1471)年12月12日死去した西大寺寺第29代長老沙門高筭と文明10(1478)年4月6日に死去した西大寺寺第30代長老沙門仙恵との間に「識春房●寛弘寺」と見えるのが寛弘寺僧の最後である。識春房は、1471年から1478年の間に死去したのであろう。

それゆえ、小林氏がすでに論じられた^{*43}ように、15世紀の70年代まで寛弘寺の存在は確実である。

それでは、いつから寛弘寺は律寺となったのであろうか。寛弘寺遺跡からは、平安時代後期の「寛弘寺」という軒平瓦が出土している^{*44}。それゆえ、寛弘寺は、古代以来の寺院であったと考えられる。

そうした寛弘寺が西大寺末寺の律寺化したのは、いつかということが問題となるが、このことを考えるうえで、寛弘寺墓地の正和4(1315)年4月8日付の五輪塔が参考になる。

第二節 寛弘寺墓地五輪塔について

寛弘寺集落の西側の山頂にある寛弘寺墓地には総高2メートルを超える巨大五輪塔がある。寛弘寺墓地は、鎌倉前期以前の層塔を中心に形成され、

その後、正和4(1315)年に五輪塔が建立された。

さて、この五輪塔の地輪の南面には、次のような銘文がある。

六道講衆造立之、
正和四年乙卯月八日、
願主八斎戒敬念、

川勝政太郎^{*45}氏、細川^{*46}氏により、この銘文から、本五輪塔は、正和4(1315)年4月8日の六斎日に、六道講衆によって造立されたこと、その願主は寛弘寺所属の斎戒衆敬念であったこと等が明らかにされている。

藤沢典彦^{*47}氏や西山^{*48}氏によれば、本五輪塔には、現在は覆屋はないが、本来は存在したと推定され、さらに、地輪部分には奉籠孔があり、そこから葬送の度に火葬骨が入れられたと考えられている。すなわち、本五輪塔は個人の墓というよりも、六道講衆たちの惣墓(共同墓)塔で、覆屋もある墓堂であったと考えられている。

ところで、敬念のような斎戒衆とはいかなる存在であろうか。斎戒衆は、近住男(女)とも呼ばれる。斎戒衆は、ともすれば僧侶と考えられているが、律宗教団においては俗人で斎戒を護持する人々のことである。斎戒とは、半人前の僧侶である沙弥が守るべき10戒のうち、離金剛宝戒以外の9戒で、午後には食事をしないという斎戒が重要なので斎戒という。忍性の父親が斎戒衆であったように、下級貴族か武士クラスの人であれば、百姓身分の人でも斎戒衆にはいた^{*49}。

斎戒衆は当時において律宗に特有な階層であり、本五輪塔は、律寺としての寛弘寺の五輪塔といえる。とすれば、正和4年段階において、寛弘寺は律寺化していたことになる。また、弘安3(1280)年の「西大寺西僧房造営同心合力奉加帳」には、西大寺所属の近住男、すなわち斎戒衆として二百文を寄付した「敬念房」が挙がっている^{*50}。当時は房名で呼称するのが普通であり、この敬念房と五輪塔銘の敬念が同一人物だとすれば、敬念は弘安3(1280)年当時は西大寺に所属していた

のかもしれない。

ところで、銘文に見える六道講とはなんであろうか。六道講とは、『織田 仏教大辞典』によれば、「六道の衆生に廻向する仏事」とある^{*51}。すなわち、死者供養のための法会である。それゆえ、六道講衆とは、六道講に結縁した講衆であろう。こうした六道講は、律宗寺院のみが行う法会ではない。

近衛兼経(1210-1259)の日記『岡屋関白記』の寛元4(1246)年6月15日条には、「順法印、永尊房 順律師等来、六道講如例」とある。すなわち、近衛兼経の家でも、六道講は行われていた。

もちろん、六道講は当時の律宗寺院でも行われていた。次の史料をみよう。

史料(5)^{*52}

- 一 てかのいのゑの事候ひて候事、御よろ□ひにて候、
- 一 □□□とうのとりのこしせめあつめ候にて、なむつあふう方々いり候はんする事、したゝめ候、明春十五日六道講はて候ハ、□□□へく候、
- 一 六道講の用途事、春になり人に下へく候、いくほとありぬへしともおほへす候、
- 一 宮恒性円か事、春御したゝめ候ハて、いつもかやうにか候はんすらんとおほへ□、
- 一 時料所の事、ふんさいはからい候へく候、
- 一 光明真言事も、諸事ふさに候、なかく寺内候

か、むつかしく候、さりなから、よ人こゝにをき候はん事、なんちに□

史料(5)は、年未詳であるが、律寺金沢称名寺関係史料であり、律寺関係で「六道講」が行われていたのは確実であろう。

やはり注目されるのは、近衛兼経といった貴族が僧侶を招いて行う六道講ではなく、ここでは斎戒衆といった武士身分ほかの人々が、お金を出し合って講衆を結集し、六道講を行っていた点である。

この点は大変重要である。というのも、当時は、死体から発生するとされる死穢への恐れにより、僧侶でさえ葬儀に関与するのをはばかっていた。ところが、叡尊らの律僧(正確には禅僧・律僧・念仏僧ら遁世僧たち)は死穢をものともせず、葬送に従事し、在家信者たちの葬送共同体をも形成していった。敬念は、六道講と呼ばれた葬送共同体の中心人物であったのだろう。

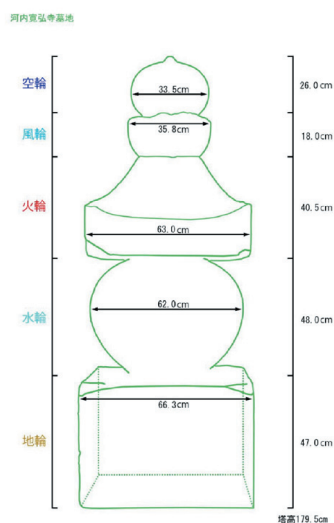
この点は、極めて重要で、史料はないけれども、寛弘寺よりも格が高い教興寺においても、五輪塔の存在に示されるように、葬送共同体は組織されていたと推測される。

以上のように、正和4(1315)年4月には、寛弘寺は律寺化していたのである。

次に、寛弘寺五輪塔について、他の五輪塔と比較してみよう^{*53}。



<寛弘寺五輪塔>



寛弘寺五輪塔は、花崗岩製で、総高は 225.5 cm、塔高は 179.5 cm、地輪の高さは 47.0 cm、地輪の幅は 66.3 cm、水輪の高さは 48.0 cm、水輪の幅は 62.0 cm、火輪の高さは 40.5 cm、火輪の幅は 63.0 cm、風輪の高さは 18.0 cm、風輪の幅は 35.8 cm、空輪の高さは 26.0 cm、空輪の幅は 33.5 cm である。

すなわち、塔高が 179.5 cm の巨大五輪石塔である。そして、前章で述べたように、水輪に注目した 3 系統の分類によれば、多少の相違はあるが、蓮台寺系である。それゆえ、律宗系の石工が建立を担ったこともわかる。

おわりに

以上、河内の中世律宗寺院教興寺・寛弘寺の実態に迫ってみた。いずれも、西大寺直末寺として活動を展開していた。とくに、寛弘寺五輪塔の建立に見られたように葬送共同体といえる六道講衆を組織するなど律僧たちは葬送活動にも従事していたのである。

ところで、教興寺に関しては、銅鐘の銘文から民衆的な寺院と見る説⁵⁴もあれば、教興寺の長老阿一が聖朝安穩祈祷の密教僧であり、また、教興寺が鎌倉將軍家祈祷寺となったことから権力と結んだ寺院という側面を強調する説⁵⁵がある。

しかし、結論的な言い方をすれば、教興寺はまさに両側面を有していたのである。よりいうならば、寛弘寺でみたように、葬送共同体などを組織し、地域住民を組織化していたがゆえに、鎌倉將軍家祈祷寺などになれたのである。ともすれば、先学には寺院と権力との癒着をきらう傾向があるが、寺院（僧侶）は革命家ではなく、救済活動のために権力と結ぶこともありえた点を忘れてはならない。

追 記

本稿作成にあたって、小林義孝氏、西山昌孝氏、藤田典子氏にはお世話になった。また、本稿は、2010 年度山形大学人文学部プロジェクト研究の成果である。

なお、本稿と密接に関係する拙著『葬式仏教の誕生』（平凡社、2011）も参照されたい。

*1 叡尊教団の全国的な展開については拙著『中世律宗と死の文化』（吉川弘文館、2010）など参照。また『平成二年度 中世民衆寺院の研究調査報告書 2』（元興寺文化財研究所、1991）も大いに参考になる。

*2 上田さち子「叡尊と大和西大寺末寺」『中世社会の成立と展開』（大阪歴史学会、1976）。

*3 細川涼一『中世の律宗寺院と民衆』（吉川弘文館、1987、第 3 章）。

*4 元興寺文化財研究所『中世民衆寺院の研究調査報告書 2』（1991）。

*5 棚橋利光「中世八尾における律宗の広がり」『研究紀要』11（八尾市立歴史民俗史料館、2000）。

*6 小谷利明「叡尊と河内武士団」『ヒストリア』179、2002。

*7 拙著『中世律宗と死の文化』＜前註（1）＞。

*8 河内国の西大寺直末寺については拙著『勸進と破戒の中世史』（吉川弘文館、1995）144 頁を参照。なお、河内国の西大寺直末寺の内で筆頭寺院であった西琳寺については別稿「河内西琳寺五輪塔と大和唐招提寺西方院五輪塔をめぐって—考古学と文献史学をつなぐ試み—」（『戒律文化』9 号、2011 予定）参照。西琳寺にも巨大五輪塔がある。

*9 『増補版八尾市史（前近代）本文編』（八尾市役所、1988）。井上正雄『大阪府全志 巻四』（大阪府全志発行所、1922）751 頁も参照。

*10 上田「叡尊と大和西大寺末寺」＜前註（2）＞。

*11 細川『中世の律宗寺院と民衆』＜前註（3）＞。

*12 元興寺文化財研究所『中世民衆寺院の研究調査報告書 2』＜前註（4）＞。

*13 元興寺文化財研究所『中世民衆寺院の研究調査報告書 2』＜前註（4）＞。

*14 元興寺文化財研究所『中世民衆寺院の研究調査報告書 2』＜前註（4）＞25 頁。

*15 拙著『勸進と破戒の中世史』＜前註（8）＞。

*16 拙著『勸進と破戒の中世史』＜前註（8）＞

136・137 頁。

*17 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前註(8)〉140 頁。

*18 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前註(8)〉160 頁。

*19 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前註(8)〉161 頁。

*20 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前註(8)〉161 頁。

*21 上田「叡尊と大和西大寺末寺」〈前註(2)〉373・374 頁など。

*22 『八尾市史 文化財編』(八尾市役所, 1977) 116・117 頁。

*23 元興寺文化財研究所『中世民衆寺院の研究調査報告書 2』〈前註(4)〉9 頁。

*24 細川『中世の律宗寺院と民衆』〈前註(3)〉90 頁。

*25 『鎌倉遺文』(18 巻 325・326 頁) 13885 号文書。

*26 『鎌倉遺文』(32 巻 339 頁) 24975 号文書。

*27 細川訳註『感身学正記』(平凡社, 1999, 317 頁) などでは、浄縁を教興寺長老如縁房阿一とする。

*28 拙著『日本中世の禅と律』(吉川弘文館, 2003), 69 頁。

*29 拙著『日本中世の禅と律』〈前註(28)〉73 頁。ただし、文教房とする。

*30 『八尾市史』〈前註(22)〉148・149 頁。谷野浩『八尾の石塔』(八尾市教育委員会文化財室, 1988) は八尾の石造遺物を写真付の解説で紹介。八尾の石造遺物を概観するのに便利である。

*31 細川『中世の律宗寺院と民衆』〈前註(3)〉90 頁。

*32 計測数値は『五輪塔の研究 平成四年度調査概要報告』(元興寺文化財研究所, 1993) 41 頁。

*33 この点は、拙著『中世律宗と死の文化』〈前註(1)〉84-90 頁参照。

*34 忍性の場合は遺言して鎌倉極楽寺、生駒竹林寺、大和郡山額安寺に 3 つの五輪塔を建てた(拙著『忍性』ミネルヴァ書房, 2004)。

*35 拙著『中世律宗と死の文化』〈前註(1)〉83 頁など参照。

*36 細川『中世の律宗寺院と民衆』〈前註(3)〉第 3 章。なお、井上正雄『大阪府全志 巻四』〈前註(9)〉にも寛弘寺は「寛弘年間の創建にして真言宗の巨刹たりしといふ。後、僅に大日堂のみを存せしも、已に廃毀して今は徒の礎石を存するのみ」(同 172 頁) とある。

*37 小林「中世の寛弘寺と寛弘寺墓地」『寛弘寺遺跡発掘調査概要 12』大阪府教育委員会, 1993。また、寛弘寺墓地を含めた中世五輪塔墓については、藤沢典彦「中世墓地ノート」(『仏教芸術』182, 1989) が大いに参考になる。

*38 西山「寛弘寺墓地の中世石造物」『寛弘寺遺跡発掘調査概要 13』大阪府教育委員会, 1994。

*39 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前註(8)〉140 頁。

*40 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前註(8)〉160 頁。

*41 小林「中世の寛弘寺と寛弘寺墓地」〈前註(36)〉。

*42 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」(速水侑編『日本社会における仏と神』吉川弘文館, 2006) で、その紹介などを行った。

*43 小林「中世の寛弘寺と寛弘寺墓地」〈前註(37)〉。

*44 小林「中世の寛弘寺と寛弘寺墓地」〈前註(37)〉。

*45 川勝政太郎「大阪付近の石造美術新資料(下)」(『史迹と美術』388, 1968)。

*46 細川『中世の律宗寺院と民衆』〈前註(3)〉第 3 章。

*47 藤沢「中世墓地ノート」〈前註(37)〉。

*48 西山「寛弘寺墓地の中世石造物」〈前註(38)〉。

*49 拙著『救済の思想』(角川書店, 2002) 62 頁。忍性の父親伴貞行が慈生敬法房であったことについては拙著『忍性』〈前註(34)〉4・5 頁を参照。

*50 『西大寺叡尊伝記集成』(法蔵館, 1977) 所収

「西大寺西僧房造営同心合力奉加帳一卷」385 頁。

*51 『織田 仏教大辞典』(大蔵出版, 1954)。

*52 「金沢文庫文書」(『鎌倉遺文』38 卷 148 頁)
29578 号文書。

*53 寛弘寺五輪塔については, 西山「寛弘寺墓地
の中世石造物」<前註(38)>を参照。

*54 上田「叡尊と大和西大寺末寺」<前註(2)>。

*55 細川『感身学正記』<前註(27)>。

A Thought about Kyōkōji-Temple and Kankō-ji Temple in Kawachi Province

MATSUO Kenji

(Professor Philosophy and Cultural Systems Course)

This paper aims to clarify how the Ritsu sect prevailed in Kawachi province, the eastern part of Osaka district, focusing on Kyōkōji-temple and Kankō-ji temple. In the Middle Ages, both of them belonged to the Ritsu sect and were the branch temples of Saidaiji temple in Nara. Kyōkōji-Temple is still one of the branch temples of Saidaiji temple.

The restoration of Kyōkōji-temple was begun in 1268 by Eizon who was the founder of the Ritsu sect. Eizon endeavored to reconstruct Kyōkōji-temple and succeeded in it by getting his followers' support. The bell, moved from Kyōkōji-temple to Kongōbuji temple in Nara prefecture and still remains at the temple, tells how Kyōkōji-temple was reconstructed.

Kankō-ji temple was famous for the big Gorin stupa built by Kyōnen in 1316. Kyōnen might be a lay follower of Saidaiji temple. Kyōnen came to Kankō-ji temple, made fund raising and built the big Gorin stupa. Through such reconstruction, these two temples became the branch temples of Saidaiji temple.